

# 北欧諸国に見る時間意識と幸福度の関係

## — デンマークの幸福論を中心に —

### はじめに

「幸福」という言葉は常に注目される言葉である。幸福は古い時代から哲学者によって論じられてきたように、人間にとって最大の関心事である。<sup>1</sup>家族や友達と過ごす時間を大切にする傾向が増えてきているとされてきている現代において「幸福感」は国民により違い国でも大きく違う。日本では二十世紀型の成長社会が象徴する「みんな一緒」という日本人にはパターン化し正解とされていた幸福論<sup>2</sup>を持っていた。

国連の「持続可能な開発ソリューション・ネットワーク (SDSN)」は、3月20日「世界幸福度ランキング (World Happiness Ranking) 2017」を発表した。国連が世界幸福度を「ウェルビーイング」という国民の主観によって評価しようとしている背景には、GDPなどの客観的な経済指標ではなく、人々の心理的な幸福度こそが重要だとする考え方からきており、主観的な「幸福度」の評価方法については、過去30年間で国際機関や学術界を中心に様々な手法が開発され、「世界幸福度ランキング」の分析方法には、先進的な手法が取り込まれている。<sup>3</sup> 同報告に北欧諸国が上位にランクインしていることが目立ち、2006年にイギリスのレスター大学が幸福度調査を行った際には第一位デンマーク、スイス、オーストラリア、アイスランドと続く。基準としては1:良好な健康管理、2:高い国内総生産 (GDP)、3:教育の機会、4:景観の芸術的な美しさ、5:国民の強い同一性、6:国民の信仰心などを基準にして測定したものである。<sup>4</sup>二つの調査結果から上位を北欧諸国が占めているのが目立つ。

その中でもデンマークは社会保障、教育、家庭のあり方やライフスタイルに至る生活や文化に関心が集まっている。北欧デザイン、デンマークデザインの家具にも注目が集まり、デンマークの恵まれた福祉制度のあり方は日本でも広く知られている中で、デンマー

---

<sup>1</sup> [橋木俊詔, 2013年, ページ: 3]

<sup>2</sup> [藤原和博, 2015年, ページ: 17]

<sup>3</sup> [world happiness report 2017]

<https://sustainablejapan.jp/2017/04/04/world-happiness-ranking-2017/26267> 引用

<sup>4</sup> [橋木俊詔, 2013年, ページ: 14]

クは住宅、都市空間の美しさ、生活空間の美しさから「ヒュッゲ (Hygge)」という言葉も注目を集めている。「ヒュッゲ」とは「満ち足りること」という意味のノルウェー語が由来である。<sup>5</sup>「ヒュッゲ」という言葉が初めて書物に現れたのは1800年代初めのころであり「満ち足りること」「幸せであること」と「ヒュッゲ」に繋がりがあるのは決して偶然ではない。<sup>6</sup>デンマークの生活空間を語るときに「美しさ」だけでは説明がつかない。ヨーロッパ社会調査機関によると、デンマーク人は「ヨーロッパで一番幸せな国民」であると同時に「友達や家族と一番よく会っている国民」でもある。この「ヒュッゲ」という言葉に国民が共感を寄せるのは、今日のデンマーク社会を紡いできた国民の教育が原点になるのではないのかと推測し、福祉の充実、政府に対するセイフティ・ネットの充実だけではないデンマーク独自の幸福感が数多くの国際比較研究において幸福度第1位を獲得したのではないかと考察した。

第1章ではデンマークの福祉国家への意識がどのようにして生まれ、幸福感を感じる国民国家の根源について考察する。第2章ではデンマークの教育、国民意識に多大な影響を与えた詩人ニコライ・フレデリク・セヴェリン・グルントヴィの存在がある。デンマークの教育思想に根付いている「個人を育てる教育」「生きるための教育」をキーワードに生涯教育、グルントヴィの対話理念に焦点を当て考察していく。3章ではデンマークの中で大切にされてきている幸福概念「ヒュッゲ」について考察し北欧デザイン、デンマークデザインに注目しながら生活環境の中へデザインとしての「幸福」をどのようにして取り入れたのか、生活空間において何を大切にしていたのかを考察していく。

## 第一章 デンマーク国民の平等意識

「幸福」を数値化したのが1981年にノーベル経済学賞を受賞したアメリカ人経済学者のノードハウスとジェームス・トービンである。彼は「Measures of Economic Welfare<sup>7</sup>」

---

<sup>5</sup> [マイク アーヴィン, 2017, ページ: 5]

<sup>6</sup> [マイク アーヴィン, 2017, ページ: 5]

<sup>7</sup> [橋木俊詔, 2013年, ページ: 3]

という指標を発表した。これは一人当たりの国内総生産（GDP）に加え、教育、医療、保健、余暇、無償労働とされていた家事労働を評価に加えたものである。国連と米コロンビア大学が設立した「持続可能な開発ソリューション・ネットワーク（SDSN）」の発表した世界幸福度ランキング（World Happiness Ranking）2017」の幸福度を測る指標のモデルとなった。

各種幸福度調査において、様々な指標から幸福度が図られているが、最もメジャーな指標は「ウェルビーイング」「生活満足度（満足度）」である。<sup>8</sup>一般には幸福度は満足度とほぼ類似した意味で用いられているが、ハーバード大学元学長で法律学者のデレック・ボックの「幸福の研究」によれば、「幸福」は気分や感情の微妙な変化を含んだ幅広い意味を持つ言葉である。それが意味するものを完全に表すような唯一の定義はないとしている。<sup>9</sup>

「幸福感」と「人生満足度」は本人が感ずる主観的な状態であるが、「ウェルビーイング」は主観的な状態と客観的な状態の両方を含むものと考えられる。客観的な状態としてのウェルビーイングは「健やかな状態（being well）」と「豊かな状態（being well to do）」の二通りの意味がある。古来、健康と富は幸福になるための二大要件であると言えよう。<sup>10</sup>

富は経済的に幸福度を上げるためには大変重要になるが、富が必ずしも幸福度に直結する訳ではない事はなく、その現象を最初に報告したアメリカの経済学者リチャード・イースタリンの名前から「イースタリン・パラドックス」と呼ばれている。<sup>11</sup>つまり豊かな人は貧しい人よりも幸福感を感じやすい場合もあるが、国別の比較としては、豊かな国の国民が貧しい国の国民と比較したときにより幸せだと感じていない場合もあり、また国自体の富が豊かになったとしても、それに引き上げられるように国民が幸福になるわけではない、という現象が見られる。幸福になるためにはある程度のお金は必要になるが、お金があればある程、幸福になれるわけではなく「求めすぎても幸福にはなれるわけではない」という事である。

デンマークでは、国民性を築き上げた国民的詩人のニコライ・フレデリク・セヴェリン・グルントヴィの存在がある。グルントヴィは牧師として布教をする中で、詩人となり、北欧の神話やデンマークの自然・風土を題材とした詩作を発表し国民的詩人となった。<sup>12</sup>

---

<sup>8</sup> [子安 杉本, 2012, ページ: 5]

<sup>9</sup> [子安 杉本, 2012, ページ: 5]

<sup>10</sup> [子安 杉本, 2012, ページ: 5]

<sup>11</sup> [子安 杉本, 2012, ページ: 5]

<sup>12</sup> [橘木俊詔, 2013年, ページ: 64]

国民小歌集の中の一つにその内容がデンマーク国民の生き方、考え方に大きく影響を与えている詩がある。「人生は、平凡で楽しく暮らし、働く生活がよい。このような生活は、王の生活と交換できない。年老いた者たちと一緒に、素朴で楽しい生活がよい。王宮の中も、あばら屋の中も、同じように素晴らしい。」<sup>13</sup> グルントヴィの考えでは、たとえ王宮に住む国王でもあばら屋の市民でも平等であることは変わらない、「エリート」の生活が「裕福な」生活あるいは教養的な「文化」生活、また「聖職者」のような生活が理想とする生活ではない。「農民」の暮らし「労働」する人々の生活にもっとも高い価値を置いている。そして、どんな場合でも国民みんなが平等であるような生活に価値を置いている。<sup>14</sup>

1833年と1834年にグルントヴィの著作の中で普通の人々こそ、意義ある教育を受ける機会が与えられるべきだと考えていることが記されており、彼の理想は、教育において教師と生徒の生き生きとした関係、生徒同士の交わりを通し歴史と詩歌を学び、自分がより大きな何かの一部であること、すなわちデンマークの人間であることに気づき、個人的自信をつけ、その自信に支えられた自由と勇気によって自分自身の生活へ戻りより良き勤勉な市民になる事を目指す成人教育であった。<sup>15</sup>

この理想はグルントヴィ自身では実現することが出来なかったが、クリステン・コールドに引き継がれ、その後の国民高等学校の模範となったパターン、青年男子のための冬のコース、女子のための短期の夏コースを開き、生徒は自発的に来校し、滞在費を払い学ぶことが確立していったのである。<sup>16</sup>

様々な混乱、困窮を乗り越えて、1864年以降この国民高等学校は、国民的エネルギーとなってデンマークの人々の祖国と精神活動にとって重要な役割を担い、1980年には全国で91校にもなる発展を遂げた。今日にいたっても国民高等学校はデンマークの人々の活動の源として重要な役割を果たしこの国の価値観を形成する重要な要素でありグルントヴィの示した思想の素晴らしさが息づいているのである。<sup>17</sup>

デンマークは農民の共同組合共和国であると言われてきた。近年急速に発達してきたスウェーデンの農民を除けば、デンマークの農民たちほど個人の自由を犠牲にすることなく、

---

<sup>13</sup> [「国民唱歌集」第17版・463番]

<sup>14</sup> [浅野, 牧野, 平林, 2006, ページ: 105]

<sup>15</sup> [織田 村上, 1996, ページ: 5]

<sup>16</sup> [織田 村上, 1996, ページ: 5]

<sup>17</sup> [織田 村上, 1996, ページ: 5]

共同組合運動を広く普及させた農民はいない。<sup>18</sup> 決して国の強制や特殊な人たちの独占的な野望によって起こされたものではなく、この組合の源にはグルントヴィの創立したデンマーク国民高等学校によって培われた成人教育があるとされる。<sup>19</sup>

デンマークでは農業は2つの意味から重要な地位を占めている。第一にデンマークの人口が消費するほとんどすべての食料を供給している事であり、他国が豊富な自然資源に恵まれている中でデンマークはただ一つの自然資源として耕地しか持っていない為である。<sup>20</sup> 19世紀後半になると、新大陸からヨーロッパに向けて安価な穀物が大量に輸入されるようになり、ヨーロッパの農業は不振に陥った。<sup>21</sup> その状況はデンマークでも同様であったが、ほかの諸地域と異なってデンマークの農民たちはこの不利な状況の中で、安い穀物を家畜の飼料として用い、畜産業を同時に発展させる事によってむしろ農業を振興することが出来た。その結果、農畜産業はデンマークの中心的な産業となり、これを支える農民は、当時のデンマーク社会で政治的に大きな発言力を持つに至った。<sup>22</sup>

デンマークでは王立農業協会が設立した後に世界で最初の酪農協同組合が作られた。個々の酪農家が加入し、飼料の仕入れや乳製品の販売を共同で行うようにして経費の節約を図り、もし事業がうまく進まない酪農家がいれば支援を行うというものである。<sup>23</sup> 積極的な利益を生み、相互扶助の活動が目的である。家畜の飼育方法や繁殖方法の改良にはっきりとした方策を立て、家畜閲覧会、家畜血統簿の保管、種牛クラブ、全家畜の共進会、農業指導員の任命、調査研究活動なども挙げた。<sup>24</sup>

高い政治意識を持った農民層が成長した時代は、同時にデンマークにおいて産業化・都市化が進展し、それに応じて都市に住む労働者たちも増大していく時代でもあった。ドイツでは、1880年にビスマルク首相が社会保険法を成立させ、この制度はヨーロッパへと急速に広まっていった。<sup>25</sup> この時導入された社会保険制度は賃金労働者を対象とし、彼らが病気や労働災害にあった場合、また障害や高齢にともない年金が必要とされた場合にこれを救済する制度であった。しかしこの制度では賃金労働者だけが恩恵を受けているのであっ

---

<sup>18</sup> [ピーター 高井, 1958, ページ: 10]

<sup>19</sup> [ピーター 高井, 1958, ページ: 11]

<sup>20</sup> [ピーター 高井, 1958, ページ: 15]

<sup>21</sup> [浅野, 牧野, 平林, 2006, ページ: 106]

<sup>22</sup> [浅野, 牧野, 平林, 2006, ページ: 106]

<sup>23</sup> [橘木俊詔, 2013年, ページ: 61]

<sup>24</sup> [ピーター 高井, 1958, ページ: 34]

<sup>25</sup> [浅野, 牧野, 平林, 2006, ページ: 106]

て、それに該当しない人々はそのような制度が導入されたとしても自分で生活を守るほかはなかった。

デンマークでは当時この問題をめぐって議論がされ、他のヨーロッパの諸国と同じように賃金労働者を対象とした社会保険制度をデンマークの社会福祉政策の基礎とするべきか否かが議論された。<sup>26</sup>農民たちもかつて安価な穀物の輸入によって農業経営に打撃を受けた経験から、何らかの福祉制度を導入することに議論はなかったが、ドイツ型モデルは農民階層が支配的な社会であり「王宮とあばら屋」に同じ価値をおくデンマーク社会には不向きであった。<sup>27</sup>そこでデンマークではビスマルクの制度と異なった理念に元づく社会福祉制度を採用することにした。すなわち賃金労働者だけを対象とする「社会保険」制度ではなく、農民をも含め国民すべてが恩恵にあずかり得る「社会保障」制度を導入したのである。<sup>28</sup>社会保障制度の対象は健康に恵まれない人、低い教育しか受けることが出来なかった人、劣悪な社会環境にある人となっている。最も救済を必要としている人々を税金によって賄うことの出来るデンマークの制度はドイツ型の制度に比べはるかに優れた利点を備えている。<sup>29</sup>

20世紀前半までに国民全体を対象とし税金によって賄われる社会保障制度を原則とするデンマークの福祉国家の基礎がしっかりと固められた。<sup>30</sup>デンマークはのちに福祉国家の典型国となるが、この農業協同組合が一つの出発点となっている。「共生」「平等」という考え方は、弱い立場に立つ人々に手を差し伸べるのではなく、ある人々が社会的に不利な立場に置かれているとしたら、その原因は社会にあるという考え方がある。<sup>31</sup>「共生」という価値観は長い間を通じて育まれたものであり、それらの価値観はさらに磨かれ、次の世代へと伝えられていく。その為には「共生」「創造」「想像」が重要だという考えに立つ教育が何よりも重要である。<sup>32</sup>人々を不利な立場に追いやっているのが社会なら自ら声を出して変えていく事で皆が暮らしやすい社会を築こうという考え方がグルンドヴィの根底にある「平等」の精神が今のデンマークの国民性として浮かび上がってきている。

---

<sup>26</sup> [浅野, 牧野, 平林, 2006, ページ: 106]

<sup>27</sup> [浅野, 牧野, 平林, 2006, ページ: 106]

<sup>28</sup> [浅野, 牧野, 平林, 2006, ページ: 106]

<sup>29</sup> [浅野, 牧野, 平林, 2006, ページ: 107]

<sup>30</sup> [浅野, 牧野, 平林, 2006, ページ: 107]

<sup>31</sup> [東海大学文学部北欧学科編, 2010, ページ: 21]

<sup>32</sup> [東海大学文学部北欧学科編, 2010, ページ: 22]

## 第2章 「近代デンマークの父」 グルントヴィの理念

デンマークにおける最も有名な著名な人物の名を3人挙げるとすれば、キルコゲール、アンデルセン、そしてニコライ・フレデリク・セヴェリン・グルントヴィが挙げられる。<sup>33</sup> キルケゴールとアンデルセンはデンマークの外でも名声を得ているに対し、グルントヴィの知名度は低い。しかし、デンマーク国民にとってグルントヴィの存在は大きく、彼は教育の面から様々な角度でデンマーク社会へ大きな影響を与えた。

グルントヴィは、1783年デンマークシェラン島南部のウズビュ村の教会牧師館で生まれた。のちにコペンハーゲンで詩人、牧師として著名活動や言論活動を行った。晩年には政治家としても活躍し、1872年に亡くなっている。デンマーク社会に多大な影響を残し、現在でもデンマークの「国父」と言われている思想家である。<sup>34</sup> 世界的レベルな教育者でありフォルケホイスコーレ運動によってグルントヴィの名は「(西側諸国の)成人教育の父」となり、グルントヴィへの関心とフォルケホイスコーレ運動は今も発展途上国で依然として広まりつつある。

グルントヴィの影響した分野は数知れず、その領域は哲学、文献学、神学、歴史、政治理論、そして教育である。デンマークの教育制度には3つの柱があり、①国民教育、②研究準備教育、③職業準備教育である。グルントヴィの教育思想フォルケオプリュスニングに基づくものであるが、特に①の国民教育(義務教育と狭義のフォルケオプリュスニング)がその中心となる。<sup>35</sup> グルントヴィは「啓蒙」をキーワードに自己認識や国民が自ら考え意識し人々の想像力を沸き立たせることを大切にした。

「啓蒙とは何か」という問いは、その後様々な哲学者によって問いかけられるが、グルントヴィ自身は「啓蒙は極めて曖昧で多義的な言葉である。」と述べている。<sup>36</sup> しかし、グルントヴィが啓蒙について明確にしている点がある。「各々の論者がより高度な啓蒙について語る場合、彼らはある種の仕方、自分たち自身についてしゃべっている」のであり、詰まる所「民衆の啓蒙とは最初から終わりまで自分自身の啓蒙のこと」と考えることが出来る。<sup>37</sup> グルントヴィは啓蒙を個人の意識覚醒として捉えているが、「啓蒙は自己啓蒙、

---

<sup>33</sup> [村井, 2009, ページ: 238]

<sup>34</sup> [児玉, 2016, ページ: 22]

<sup>35</sup> [清水, 1996, ページ: 62]

<sup>36</sup> [児玉, 2016, ページ: 29]

<sup>37</sup> [児玉, 2016, ページ: 30]

個人化」という解釈には警鐘を鳴らしている。グルントヴィは、個人の利益のみを出発点とした啓蒙は、なんの貢献もせず、公的権威に利益を提供することもなく、社会を解体していくような他の人々に最小の利益しか残さない様な個人の利益のみを意識された啓蒙に対しては「個人化」とし厳しく批判し、間違った啓蒙だと訴えている。これに対して、個人として共同・友愛の美德によってのみ存在するという条件に基礎づけられている啓蒙を真の啓蒙とした。<sup>38</sup> 人類の普遍的な理想を重視するのではなく、国民という運命を共にする総体を重視しなければならぬと主張し、個々の子供がその成長の上に文化全体の発展史を繰り返し、各国民は独自の民族と国民精神を持つという差異観念が存在し、各時代各国家において独自の幸福の形を実現しようとする多くの国民が存在すると考えたのである。<sup>39</sup> そしてグルントヴィは、若者により一層の支援を行うことが人間全体の輝きを増すことであろうという啓蒙思想に到達したのである。個人的自身を付け、自分自身がデンマーク国民であるという自覚を大切にし、より良き勤勉な市民になる事を目指したのである。

グルントヴィのテキストには「*folkelig*」という言葉が頻繁に出てくる。一般的な邦訳としては「民族的」という語が当てはまる。しかしオヴェ・コースゴーによると「*folkelig*」はデンマークの歴史の中で構築された概念であり、その概念を他言語に訳すのは困難であると述べている。コースゴーによれば「*folkelig*」は国家と国民の両方、あるいは国民として理解された国家、真の国民という概念になる。<sup>40</sup>

グルントヴィは、学問的に優れた者が一般庶民へ学ばせることではなく、デンマークに住む人々が母語であるデンマーク語によって自ら国民として自覚することだと述べている。ラテン語が広い分野において高度な教育へのアプローチとしてとどまっていたのに対し、デンマーク語は、それ以前とは全く異なる度合いで平民の成人、社会生活へのアプローチとなったのである。<sup>41</sup>

ヨーロッパにおいては古代より教会や学問的な領域での使用言語はラテン語であった。近代ヨーロッパにおいてもラテン語は知識人の公用語として使われていた。ルネサンス以降に英語、フランス語、ドイツ語が学術用語としての権利を取得していく中でデンマーク語はデンマーク国内においてでさえ野蛮で無知な言葉とされ、教会や学術的な場ではフラ

---

<sup>38</sup> [児玉, 2016, ページ: 30]

<sup>39</sup> [児玉, 2016, ページ: 31]

<sup>40</sup> [児玉, 2016, ページ: 31]

<sup>41</sup> [オーヴェ, 川崎, 高倉, 1999, ページ: 114]



ンス語、上流階級の公的な場においてはフランス語やドイツ語が使用されていた。<sup>42</sup>デンマーク語が無知な農民の言葉であり、有力者はラテン語学校へ行き、やがてデンマークの高官となって権力を持つ。人口の多数派をしめる農民が国民としての権利を持ってないという矛盾した状況に対する憤りを抱いていたグルントヴィはラテン語重視の学問にたいして「民族、民衆から引き離される」「死の状態であり」「人間の生に対して敵対的である」と主張した。<sup>43</sup>

農業従業者が非常に多いデンマークにおいてラテン語を学ぶ意義を見出すことは困難であった。グルントヴィは母語による生きた言葉こそが、デンマーク人にとって意味があると考え、アカデミックな言葉ではなく自分たちの実存を相互に確認していく事が可能な日常語を擁護し、デンマーク語によって国民自らを覚醒していく事こそが「啓蒙」であると考えたのである。

18世紀末における国民的な自己認識は、首都と地方都市の市民の上・中流階層に限られたものであったと思われる。農村地域においては地主と聖職者、官公吏、領主館の高位従僕のみに行き渡っていたにすぎない。<sup>44</sup> それに対し一般平民の国民的な自己認識は低くかった。「一般市民を国民に」とすることに成功したのは1814年に平民学校により実施された学校制度に負うところが大きかった。<sup>45</sup>

国民の自己意識を育てるには、書かれた言葉のみの教育ではなく、生活の中で語られる言葉や「対話」というキーワードを元に国民の共通意識や共生という感覚が育つ可能性があるとしてグルントヴィは考えた。<sup>46</sup> そのためには、国民の自己意識の十分な理解が必要であり、人間が共通する生の経験に自覚的に生きていく事が出来れば、次の世代へと精神的に発達させる手伝いを行うことが可能となる。なによりも「生きた言葉」を次の世代へとつなげ伝え続けることにより教育以上の学びを得ることが可能となる。人間自らの「長所全体を自らの子孫に再生させる」ことが人類に課せられたものであり、人間は自覚的に自らの自己意識を伝達するには自己意識を十分に理解しなければならないとする。自己認識の十分な理解こそが「人生の啓蒙 (livsoplysning)」であるとする。人生の啓蒙を伝え、継

---

<sup>42</sup> [児玉, 2016, ページ: 40]

<sup>43</sup> [児玉, 2016, ページ: 41]

<sup>44</sup> [オーヴェ, 川崎, 高倉, 1999, ページ: 113]

<sup>45</sup> [オーヴェ, 川崎, 高倉, 1999, ページ: 114]

<sup>46</sup> [児玉, 2016, ページ: 38]

承する為には、教科書を丸暗記するような授業では不可能であると考えた。<sup>47</sup>

グルントヴィは、生きた言葉による対話を通じて、人々は啓蒙を体験することが出来るとした。対話には自国の歴史が語られていくことが必要であり、その経験こそ最良の肥沃な土壌を醸成するであろうと考えていた。<sup>48</sup>そしてそこに公共の精神が自ずと生まれてくるという考えに至った。つまり、公共の精神は、個人の犠牲や強要から生まれてくるものではなく、社会の相互作用のなかで生み出されていくという結論を見出したのである。<sup>49</sup>

グルントヴィは多数の人へ語りかけることも含めて、生きた言葉で語りかけ相手を承認し、相手からの語りかけを待つことを対話としたのである。<sup>50</sup>対話そのものによってのみ、個人の啓蒙を教えることが可能になるとしたグルントヴィは、既存のラテン語によるテキスト中心の学校教育を「死んだ教育」とし、デンマーク語による対話によって「生きた学校」にならなければならないとした。<sup>51</sup> 死んだ学校から生の学校へ開かれるためには、書くことから言葉を解放することで、人間的な威力を生み出すことが可能になるとグルントヴィは考えたのである。そして、具体的にどのようにして民衆に働きかけていくかという命題に対してグルントヴィが出した答えは「生きた言葉 (det levende ord)」と「相互作用 (vekselvirkning)」による対話であった。<sup>52</sup>

グルントヴィの教育における言葉の重要性については、ヨハン・ゴットフリート・ヘルダーの影響が大きいと考えられる。<sup>53</sup>当時、学术界では言語の起源は人間ではなく、「神から与えられたもの」とする伝統的な言語神授説が影響力を持っていた。<sup>54</sup> それに対する反論としてヘルダーは 1772 年に『言語起源論』を出版した。この著書においてヘルダーは「言語なしでは人間は理性を持たない。理性なしでは人間は言語を持つことはない。」と述べている。<sup>55</sup> 言語と理性なしでは人間は神の教えを受けることはできなく、そして神の教えなくして人間は言語およびに理性をも持つことは無いと述べ、神による言語創造を否定したのである。言語神授説の立場の研究者達からの非難は多大なものであったが、へ

---

<sup>47</sup> [児玉, 2016, ページ: 38]

<sup>48</sup> [児玉, 2016, ページ: 44]

<sup>49</sup> [児玉, 2016, ページ: 45]

<sup>50</sup> [児玉, 2016, ページ: 44]

<sup>51</sup> [児玉, 2016, ページ: 34]

<sup>52</sup> [児玉, 2016, ページ: 34]

<sup>53</sup> [児玉, 2016, ページ: 38]

<sup>54</sup> [児玉, 2016, ページ: 38]

<sup>55</sup> [ヨハン 木村, 1972]

ルダールの言語観はのちの近代言語学の礎にもなったと考えられる。<sup>56</sup> また、ヘルダーは人間の精神的発展において個人と国民の繋がりが重要であると考えた。そして、我々が異なる民族や国民に属している以上、人類の万物普遍の光はない。民族、国民の光を部分的に得る事によってのみ神性の光を得ることが出来るとした。<sup>57</sup> 国民はそれぞれに独自の国民性を持つが、それは遺伝的に組み込まれている物ではなく、文化、歴史から学ぶことによって得る事が出来るものであると主張した。

そしてさらにヘルダーは、言語は過去の思想、感情、価値観を明らかにする媒体であり、現在に生きる人と過去を結びつけるものであり、生きた歴史の展開を表現するものになると考えた。母国語と歴史を通して人は共通の遺産を受け取り、歴史と言語の共有が共同体を作り上げるとした。歴史と言語の共有があり、その基盤の上に文化生活が創造され、そして歴史と言語の共有の媒体は民謡や民話といった継承物語であると考えたのである。<sup>58</sup> この考え方はグルントヴィーへ引き継がれていき、グルントヴィーもまた言語を国民の文化を創造していく不可欠な要素として捉えていった。さらにグルントヴィーは活字としての言葉ではなく、生活の中の「生きた言葉」にのみ、その力があると考えていったのである。

### 3章 北欧デザインの中の幸福

北欧は、機能的で洗礼されたデザインでも知られており、デンマークからも有名なデザイナーや建築家が多く出ている。中でも最も有名なのはアーネ・ヤコブソンであろう。<sup>59</sup> 建築家としてデンマーク国内で、オーフス市庁舎、デンマーク国立銀行、SAS ロイヤルホテルなどといった多くの名建築を設計した。さらに家具では日本でも誰もが一度は見たことがあるであろう「アントチェア」「エッグチェア」「セブンチェア」を世に生み出した。<sup>60</sup> 日本においてもデンマークデザインといった言葉をよく見かけるようになり、デンマークにおいても Dansk Design（「デンマークのデザイン」の意味）という表現はあらゆるところ

---

<sup>56</sup> [児玉, 2016, ページ: 38]

<sup>57</sup> [児玉, 2016, ページ: 38]

<sup>58</sup> [児玉, 2016, ページ: 38]

<sup>59</sup> [銭本, 2012, ページ: 36]

<sup>60</sup> [銭本, 2012, ページ: 36]

で見かけるようになった。<sup>61</sup>

私たちの暮らしの中で慣れ親しんできたもので言えば、おそらく多くの人が子供の頃に色彩豊かなレゴ (LEGO) のブロックで遊んだ経験があるだろう。また、軽い口当たりのカールスバーグ (カールスベア) ・ビールの緑色のロゴなどもある。<sup>62</sup>また藍色のブルーフレッド模様の美しい高級テーブルセットで知られているロイヤル・コペンハーゲンやジョージ・ジェンセンの銀製品や装飾品やルイス・ポールセン社のランプシェードなどの北欧家具が有名である。<sup>63</sup>

デンマーク家具の特徴はデザイナーの優れた感性とそれを製作する職人の優れた技術が、常に一つの作品に終結することにあると言われてきた。<sup>64</sup>この考えは作り手の一品制作の家具であれ、量産の家具であれ、その基本の姿勢に変わりはない。デザインする力と作る力がお互いに水平の関係によって成立し、そのことがお互いの能力をより大きなものに行っていると言えよう。<sup>65</sup>もう一つは常に、作品の背後にそれを使用する人々の限りない共感を読み取ることが出来る事である。人間が使い親しみ年月を重ねていく事で、家具がその人とその人生を共有するであろう所まで、物のあり方を突き詰めていく態度でもある。<sup>66</sup>それはいつも、日常の一般庶民の生活への共感であり、人間そのものへの共感であり、その物を作るための素材に対する独特の理解と感性が読み取れ、それはただ素材の持つ質や性格を鵜呑みにするのではなく素材の質を深く理解したうえで、人間の技や技術がどれほど素材を活かしきれるか、デザインと制作技術を通じて挑戦する態度である。<sup>67</sup>

現代のデンマークデザインの礎は1900年代初めに築かれたといえる。<sup>68</sup>当時、デンマーク家具の伝統に多大なる影響を与えたのはコペンハーゲン芸術院で教授を務めたコーオ・クリントであろう。クリントの教えるはデンマーク機能主義とも呼ばれ、過度の装飾を取り除いた機能的な家具を製作することに取り組んでいた。<sup>69</sup>「よりよい生活を」というスローガンはあらゆる国、あらゆる時代に掲げられた理念である。<sup>70</sup>デンマークで1990年代

---

61 [村井, 2009, ページ: 302]

62 [浅野, 牧野, 平林, 2006, ページ: 2]

63 [浅野, 牧野, 平林, 2006, ページ: 2]

64 [織田 村上, 1996, ページ: 4]

65 [織田 村上, 1996, ページ: 4]

66 [織田 村上, 1996, ページ: 4]

67 [織田 村上, 1996, ページ: 4]

68 [村井, 2009, ページ: 302]

69 [村井, 2009, ページ: 302]

70 [織田 村上, 1996, ページ: 4]

はじめに掲げられたこの理念が「よりよく住むこと」に価値を見出した精神を育み、建築や室内、生活用品のデザインを含むデザイン運動の大きなうねりとなった。<sup>71</sup>

あらゆるデンマークデザインの底流には、民衆により良い日用品を提供しその生活を確実に豊かにすること、その豊かさが本質的なものであること、そのことがデザイナーの使命であり美しいより良き物に囲まれた生活は常に幸せであるという純粋な確信が流れている。<sup>72</sup>

生活の中の日用品を洗練させ、素材の可能性をぎりぎりまで突き詰め、シンプルではありながらもその物の質に対する様々なアイデアに挑戦し「よりよい生活を」という運動にまで進んだ精神はデザイナーだけのものではなかった。<sup>73</sup>デンマーク機能主義が基本となる根底にはグルントヴィの示した思想の「王宮とあばら屋」に価値を置く精神がある。デンマークデザインを語る時、19世紀に大きく発展した民主主義の考え方が20世紀のモダンデザインに到達するまでの重要な基礎になっている。<sup>74</sup>

グルントヴィの示した教育思想がデンマークの人々に対してもつ意味は非常に大きく、デンマークの価値観を形成する重要な要素であるといえる。<sup>75</sup>「対話」を大切にした自主的で自由な教育が150年の長きにわたってたえることなく存続し、大衆の生活の中にしっかりと根付き生活の哲学や価値観を育んだ。<sup>76</sup>

デンマークの様々な協同組合運動は1800年代に農業組合から始まり、文化活動としては出版活動、映画制作、劇場にまで及び1932年には技術教育と一般教養教育を併せ持った組合の学校が設立された。<sup>77</sup>このような組合運動の流れを見ても、この国が持つ生活への価値観が単に経済の優位性だけを追いかけるのではなく、人々に日常生活の確実な充実と落ち着いた精神をもたらすことであることがわかる。

デンマーク社会は非常に早い時期から人々のあらゆる階層を通して生活に基本を置いた人々の幸せ、豊かさを目指してきた国であり、そのことが何を重要なものとするかという価値判断を育ててきたといえる。<sup>78</sup>「協力」によって社会の改善を図ることが、デンマー

---

71 [織田 村上, 1996, ページ: 4]

72 [織田 村上, 1996, ページ: 5]

73 [織田 村上, 1996, ページ: 5]

74 [中島, ほか, 2014, ページ: 174]

75 [織田 村上, 1996, ページ: 5]

76 [織田 村上, 1996, ページ: 5]

77 [織田 村上, 1996, ページ: 6]

78 [織田 村上, 1996, ページ: 6]

クの人々の共通の考えに定着し、国家の基本概念になった。そして、すべての人々がそれぞれの意見を述べられる平等な自由と人々が共同で一つの目標を達成することを実践により学ぶ教育はデンマークデザインの振興を促した思想的な背景になっている。<sup>79</sup>

デンマークデザインの背景には中世のバイキング時代にもさかのぼれる優秀な木材や金属の加工の知識と技法の伝統がある。<sup>80</sup>デザインの歴史を辿ると 19 世紀から 20 世紀の初めにかけてのデンマークの家具のデザインはその時代の中央ヨーロッパ、とくにフランスやイギリスの様式を模倣していた。<sup>81</sup>高価な工芸品を使うことは富裕市民や王族、貴族を中心とした上流階級の物であり、まだ独自のデザインを持つまでには至っていなかったのであるが、様式として独自の物はなくともヨーロッパからの影響を受けつつ新古典主義様式を洗礼することに向かっていったといえる。単に模倣するだけではなく、そこには独自の品質管理への意識、そして今日まで引き続きデンマーク家具の重要な価値となっているクラフトマンシップの養成がはじまったのである。<sup>82</sup>

一時代前の 1770 年にすでに美術アカデミー（現大立美術大学）に基づいて採択された原則、すなわちアカデミーの学生と職人たちへの製図教育と作られた作品への検査とその認可に関わる原則の重要性がその先手を切ったのである。これは単にデザイナーや建築家だけでなくあらゆるジャンルの制作に関わる職人たちにも製品に対する鑑識眼、審美眼を養成し、かつ製図の能力を付けさせる必要性を説き美術アカデミーに親方のところへ修行中の多くの弟子たちを通わせなければならないという宣言である。

この宣言によってデンマークデザインを支えている物の萌芽が見られる。<sup>83</sup>さらに 1777 年に王立家具商會が設立され、クラフトマンシップの伝統推進に大きな役割を果たしたのである。この協会は会員である製造工場にいい材料や作品のモデル、その図面などを供給し、製品の品質やデザインの水準を管理し、よく売れる商品の製造を指導することを目的としたのであった。この協会の初代マネージャーはローセンベアーであった。彼はフランスの建築家、ジャルダンの弟子であった為、自然にフランスの影響を受けていたのである。またその後継者のアンカーはイギリスの影響を強く受けていた人であった。

このように指導者の背景によってこの時代のデンマークはヨーロッパから様々な影響

---

<sup>79</sup> [中島, ほか, 2014, ページ: 175]

<sup>80</sup> [中島, ほか, 2014, ページ: 175]

<sup>81</sup> [織田 村上, 1996, ページ: 6]

<sup>82</sup> [織田 村上, 1996, ページ: 6]

<sup>83</sup> [織田 村上, 1996, ページ: 6]

が入りこみ、制作の背景を作っていた。ここで確立されていった品質管理にかかわる精神、洗礼された審美眼、職人のクラフトマンシップの流れはその後のアカデミーの優れた指導者たち、王立家具商会の優れたマネージャーたちによって引き継がれ育てられていったのである。<sup>84</sup>

しかし、王立家具商会は 1815 年に経済の停滞の影響を受けて閉鎖された。それと同時にデンマークの近代家具デザインにとって重要なことが起こっている。コペンハーゲン家具工業協同組合の拡大である。この組合は元々 1554 年には結成され独自に店舗を持ち、参加しているキャビネットメーカーは製品を販売することが出来た。それだけではなく、この組合結成によってもたらされた物は、なによりも製品の品質向上とクラフトマンシップの向上であった。このことはこの国の近代家具デザインを語るうえで欠くことの出来ない重要性を持っている。

1780 年にはさらに店舗を増やし、その後の多様な社会の変化によって困難な時期も個人や制作会社から寄せられた作品を展示しつづけ、第一次世界大戦後のヨーロッパにおける工業化の嵐の中で品質の低下や、職人のクラフトマンシップの消失と商業化という変化、またそれがもたらす品質の無視、素材の本質的理解の損失、そして様式の混乱等の様々な事柄が起こったが、今日までデンマークデザインの精神を繋ぎとめ、今日の再生をもたらせたのはこの協同組合の存続の力であったといえる。<sup>85</sup>

このようにデザインの中でも「教育」というキーワードがこのデンマークデザインの礎を築いた。この国の人々が持つ豊かな価値観の背景を探りながら単に物の集積をただけではなく、一つの文化を成立させたとも言える。最初は模倣であったデンマークデザインも家具の数々をまとめてみると、すでに個別のデザイナーを超えた時代の様式としての「デンマーク近代家具」という形で表れていくのである。<sup>86</sup>この伝統が、デンマークデザインへ向けて若い創造者たちへ引き継がれていき、デンマークの近代デザインは単にデザイン運動の成果ではなく、近代における社会運動であった。<sup>87</sup>

美術アカデミーにおいて採択された原則がデンマークにおいて、デザインの復興を促した思想的な背景になっている。<sup>88</sup>クラフトマンシップを育て、デザインを継続して改良し、

---

<sup>84</sup> [織田 村上, 1996, ページ: 6]

<sup>85</sup> [織田 村上, 1996, ページ: 6]

<sup>86</sup> [織田 村上, 1996, ページ: 6]

<sup>87</sup> [織田 村上, 1996, ページ: 10]

<sup>88</sup> [中島, ほか, 2014, ページ: 175]

磨き上げるデザイナーと職人が生きる価値観を築いた教育の原点はグルントヴィの教育理念による民衆の生活向上によって支えられてきたのである。<sup>89</sup>

歴史を遡ると陶芸や北欧独特の織物、あるいは銀器などの優れた工芸品の例が多数みられる。ロイヤル・コペンハーゲン社のブルーフルーテッド模様の美しい陶磁器やジョージ・ジェンセン社の銀食器や装飾品などは工芸職人の技によってデンマークの伝統工芸として受け継がれてきたものの代表的な例であろう。<sup>90</sup>

こうした日常使う物を美しく制作する工芸をデンマーク語では「ブルースクンスト」(brugskunst: 使う物の美術)と称されている。<sup>91</sup>1920年から1930年に始まるモダンデザインによって優れた機能と心地よさを兼ね備えたエレガントな形態の家具などの製品の量産が可能になると、一般の人々でも良質は製品を利用できるようになった。デンマークでは、たとえ工場で大量生産されたものであっても製品に品質と価値が求められる。良い素材を用いて機能的であり、形状も美しくさらに耐久性に優れている製品で、その製造者の仕事を尊重して値する価格であれば、少々高額でも購入する傾向にある。<sup>92</sup>良いものを長く使うことは世代から世代へと受け継がれ、デンマークの一般家庭で使われているロイヤル・コペンハーゲン社の食器やポール・ヘニングセン設計の照明器具、ハンス・ウェグナーのデザインした家具など優れたデザインの高価な製品は両親や祖父母から受け継いだものは少なくない。<sup>93</sup>

デンマークの生活空間の中で家具と同じくらいに照明器具や明かりも重要視されている。ルイス・ポールセン社はシェードがいくつも重なり合って穏やかな光を空間に与える大小の照明器具で有名である。<sup>94</sup>室内に十分で心地よい明るさを与えるだけではなく、光による雰囲気作りをするというルイス・ポールセン社の照明のコンセプトは、1920年代にポール・ヘニングセンとの照明器具の開発が始まった時から変わらず今日まで引き継がれており、ヘニングセンはデンマークだけではなく、世界中で知られている「PHランプ」シリーズのデザイナーである。<sup>95</sup>あらゆる社会層の人々が、暗い空間を明るく灯すことが出来る様に1920年代に若きヘニングセンは電灯のデザインに取り組んだ。室内を穏やかな光で灯

---

<sup>89</sup> [中島, ほか, 2014, ページ: 153]

<sup>90</sup> [中島, ほか, 2014, ページ: 175]

<sup>91</sup> [中島, ほか, 2014, ページ: 175]

<sup>92</sup> [中島, ほか, 2014, ページ: 176]

<sup>93</sup> [中島, ほか, 2014, ページ: 176]

<sup>94</sup> [中島, ほか, 2014, ページ: 168]

<sup>95</sup> [中島, ほか, 2014, ページ: 168]



すというヘニングセンの電灯器具への考えがデンマークの照明器具のデザインの基礎になった。<sup>96</sup>

なぜ、デンマーク人はここまで照明器具への拘りがあるのか、それはデンマークの長い冬の時期が続く気候が大きく影響している。<sup>97</sup>冬も長いが雨の日が年間 179 日もあり、必然的に室内で過ごす時間が多くなる。<sup>98</sup>

ヘニングセンは人々の暮らしについて「人は自然のままに住まうべきである。自然のままに生きるべきである」と語ったと言われている。そしてヘニングセンは住まいとは「人が滞在できる場所」であるという事が重要であり、そうすると少しばかり雑然としたりするが、住まいとはそういうものであるとも語っている。<sup>99</sup>照明器具の穏やかな明かりや、ろうそくの「生きている」光を灯し親しい友人や家族と穏やかに過ごすことはデンマーク人が「ヒュッゲ」と呼ぶ、昔から大切にしている時間の使い方である。<sup>100</sup>

「ヒュッゲ」の起源となったノルウェー語は「満ち足りる事、満足できる暮らし」といった意味である。<sup>101</sup>世界幸福度調査では「幸福である事の第一条件は生きていくために必要な生活レベルが保証されていること。そして生活レベルが満たされると、幸福の形は多様化し、収入よりも人間関係に左右される」と述べている。<sup>102</sup>人間が幸せかを知る尺度は人間関係であり、人間関係を豊かにするにはどのような社会を作ればよいのか、どのような人生を送ればよいのかが重要になる。ヨーロッパ人の 60 パーセントは少なくとも平均して週に 1 回は友人や家族、同僚と顔を合わせて交流する。親しい友人や家族と過ごすことを大切にしているデンマークでは、この割合が 78 パーセントにも上る。<sup>103</sup>

アメリカのプリンストン大学の科学者グループによる幸福についての研究がある。<sup>104</sup>2004 年から始まり今では権威ある研究と認められている。グループを率いるのはノーベル賞受賞者の心理学者ダニエル・カーネマン博士である。

この研究ではカーネマン博士が提唱する「DRM (一日再構築法)」という方法が用いられ、毎日の生活を細かく振り返って記録をし、楽しく感じたのは何をした時か、不安に思

---

96 [中島, ほか, 2014, ページ: 168]

97 [マイク アーヴィン, 2017, ページ: 14]

98 [マイク アーヴィン, 2017, ページ: 14]

99 [中島, ほか, 2014, ページ: 169]

100 [中島, ほか, 2014, ページ: 169]

101 [マイク アーヴィン, 2017, ページ: 5]

102 [マイク アーヴィン, 2017, ページ: 54]

103 [マイク アーヴィン, 2017, ページ: 51]

104 [マイク アーヴィン, 2017, ページ: 56]

ったのは何をした時か、落ち込んだ時の様子などに項目を分けて調べていくものである。被験者としてテキサス州の909人の女性が参加し、前日にした事などを細かく日記に記し質問に対して7段階で答えるものである。結果はやはり予想通りであったが、楽しくない活動で通勤時間・仕事・家事といった活動が並んだ。恋人との時間・人付き合い・食事・息抜きが最も楽しい活動として上位に挙がってきた。<sup>105</sup>

「ヒュッグ」は一人でも楽しむことが出来るが、親しい友人や家族との時間から生まれてくるものであり、何よりもゆっくりと時間をかけて「会話」を楽しむことを重要としているのである。この「会話」を大切にしている習慣はグルントヴィの教育思想から、デンマーク文化に深く根付いている特徴である。<sup>106</sup>

一番大切な人間関係において、様々な経験や思いを共有し、お互いに理解し助け合う習慣が何よりも「ヒュッグ」なのである。これはグルントヴィの生きた言葉による対話を通じて、人々は「啓蒙」を体験することが出来るという考え方が習慣化し、教育という枠を超えて人と対話をする時間が当たり前である価値観が育っている。

対話には自国の歴史が語られていくことが必要であり、その経験こそ最良の肥沃な土壌を醸成するであろうと考えていた。豊かな人間関係は幸福に繋がるとともに幸福によって豊かな人間関係も生まれてくる。<sup>107</sup>

この点において家族や友人と一緒に過ごす時間を何よりも優先し、ゆっくりと時間をかけて会話を楽しみながら豊かな人間関係を築くのがデンマーク流である。<sup>108</sup>家での過ごし方が「ヒュッグ」の原点であり、その穏やかな「ヒュッグ」な時を引き立てる、機能的でシンプルかつエレガントなテーブルウェアや家具などでデンマークの人々の暮らしにいつまでも続く親しい人や家族と「対話」を楽しみながら「豊かな時間」を与えるためのデザインが、時代を超えて生き続けている。<sup>109</sup>

---

<sup>105</sup> [マイク アーヴィン, 2017, ページ: 56]

<sup>106</sup> [マイク アーヴィン, 2017, ページ: 51]

<sup>107</sup> [マイク アーヴィン, 2017, ページ: 274]

<sup>108</sup> [マイク アーヴィン, 2017, ページ: 274]

<sup>109</sup> [中島, ほか, 2014, ページ: 169]

## おわりに

本論文では「平等」「対話」というキーワードが1章から3章にかけて重要になってくる。この論文にある「平等」とは人間社会の階級格差や身分などの「平等」ではなく、人々の日常生活にある「共生」「創造」がもとになった「平等」である。

グルントヴィーの思想である「王宮とあばら屋」の考え方に同じ価値を置くデンマーク国民と「対話」を重要視し、自らがデンマークの国民である事への自覚を大切にすることから聖職者やエリートであろうとも裕福な生活が理想ではなく、いかに皆が平等であるか国民全体が自ら考える力のある人間へと成長するための段階を踏むことが大切であると考えた。

自らの祖国を大切にし、国民にアイデンティティと生き方の方針を与えるものとしてグルントヴィーの思想が浸透していった。彼にとって国民的な啓蒙教育がその出発点であり、普遍的な人間性を見失ってはならないと訴え、彼はすべての具体的な事象を本質的に理解する事を人間の最終目的とした。

生きた言葉による対話を通じて、人々は「啓蒙」を体験することが出来るという考え方が習慣化し、教育という枠を超えて人と対話をする時間を何よりも優先することが当たり前である価値観が育った。他の人々に最小の利益しか残さない様な個人の利益のみを意識された啓蒙に対しては「個人化」とし厳しく批判し「平等」であることを訴えつづけた。

そしてデンマーク国民の価値観を形成する重要な要素である「対話」と自主的で自由な教育が国民の生活の中にしっかりと根付き、生活の哲学や価値観を育むことで国家の基本概念になったのである。

国家の基本的概念のもとで、国作りに国民みずから積極的に参加する国民性が生まれ、共同で一つの目標を達成することを実践により学ぶ教育はデンマークデザインへの振興をも促した思想的な背景となっていったのである。

すべての人々がそれぞれの意見を述べることの出来る平等さが世界有数の福祉システムに繋がり、さらには「ヒュッグ」というフラットに共存する文化の中で社会のサポートシステムが生まれ、グルントヴィーが「対話」という人間が生活において最も基本的なことを重要視する価値観が国民に根付いたことで「ヒュッグ」を実感しながら暮らすことが出来るからこそ「世界一時間の豊かな国」と言われているのではないだろうか。

## 引用文献

- 「国民唱歌集」第17版・463番。(日付不明).
- world happiness report 2017. (日付不明). 参照先: <http://worldhappiness.report/>
- オーヴェコースゴー, 川崎一彦 (監訳), 高倉尚子 (訳). (1999). 光を求めて デンマーク成人教育 500年の歴史. 東海大学出版会.
- ピーターマニケ, 高井泉. (1958). 民主の国デンマークその教育と協同組合. 社団法人 光の家協会.
- マイクヴァイキング, アーヴィン香苗 (訳). (2017). ヒュッゲ 365日「シンプルな幸せ」の作り方. 三笠書房.
- ヨハンゴットフリートヘルダー, 木村直司 (訳). (1972). 言語起源論. 大修館書店.
- 橘木俊詔. (2013年). 「幸せ」の経済学. 岩波現代全書.
- 子安増生, 杉本均. (2012). 幸福感を紡ぐ人間関係と教育. ナカニシヤ出版.
- 児玉珠美. (2016). デンマークの教育を支える「声の文化」 オラリティに根ざした教育理念. 新評論.
- 織田憲嗣, 村上太佳子. (1996). デンマークの椅子. 光琳社出版.
- 清水満. (1996). 生のための学校 デンマークで生まれたフリースクール「フォルケホイスクーレ」の世界. 新評論.
- 浅野仁, 牧野正憲, 平林考裕. (2006). デンマークの歴史・文化・社会. 創元社.
- 錢本隆行. (2012). デンマーク流「幸せの国」のつくりかた—世界で一番住みやすい国に学ぶ101のヒント—. 明石書店.
- 村井誠人 (編著). (2009). デンマークを知るための68章. 石明書店.
- 中島明子, 小川正光, 小川裕子, 丸谷博男, 福田成美, 海道清信. (2014). デンマークのヒュッゲな生活空間—住まい・高齢者住宅・デザイン・都市計画—. 萌文社.
- 東海大学文学部北欧学科編. (2010). 北欧学のすすめ. 東海大学出版会.
- 藤原和博. (2015年). 本を読む人だけが手にするもの. 日本実業出版社.